



道徳的個人主義の展開と「心」の聖化

山田, 陽子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2004-03-31

(Date of Publication)

2012-05-22

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3063

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003063>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 245 】

氏 名・(本 籍)	山田 陽子	(大阪府)
博士の専攻分野の名称	博士(学術)	
学 位 記 番 号	博い第496号	
学位授与の 要 件	学位規則第4条第1項該当	
学位授与の 日 付	平成16年3月31日	

【 学位論文題目 】

道徳的個人主義の展開と「心」の聖化

審 査 委 員

主 査	教 授	三上	剛史
	教 授	宗像	惠
	教 授	廳	茂
	助教授	野谷	啓二
	助教授	上野	成利

論文内容の要旨

氏名 山田陽子

専攻 人間文化科学

指導教官氏名 三上剛史教官

論文題目 道徳的個人主義の展開と「心」の聖化

論文要旨

本稿の目的は、現代社会における心理学的知識の普及と「心」の聖化、および道徳の心理学化について、その社会学的由来をデュルケムの道徳的個人主義の学説・理論的継承という観点から考察した後、現代日本の「心の教育」を事例に取り上げ、具体的資料にもとづいて心理学的知識による人格形成と社会統制のあり方を明らかにすることにより、道徳的個人主義の現代的位相と道徳の心理学化について論じることである。

本論文の主要な関心は、「心理学化」(P.L.Berger)に置かれている。心理学化とは、医療や福祉、教育、家庭、労働、司法など様々な領域の社会的制度に心理学的知識が組み込まれることによって、自己認識や自己形成、逸脱類型、すべての人柄に共通する諸問題が心理学的な視角に依拠して創出されていく現象である。

特定の知識が広まる背景には、何かしらの時代的要請や社会的要因が存在する。知識は、それが発生する社会や時代の影響から自由ではない。知識と、それが生産され活用される社会状況や担い手の意識特性とは密接な連関がある(K.Mannheim)。「心」が重要だと語りかける一方で、それを操作対象とする心理学的知識の普及はいかに説明されるだろうか。心理学的知識は現代社会の中でどのような役割を担い、人格形成や社会統制に具体的にどのような影響を及ぼしているのか。そもそもなぜ現代社会では「心」に多大な関心が払われるのか。どのような社会的素地がそれを可能にしたのであろうか。本論では、これらの

問いについて、心理学的知識そのものの性質や功罪を問題とするのではなく、主に道徳的個人主義の変容という観点から分析する。

第1章では、本稿で「心」の聖化と呼ぶ現象について「心理学化」や「感情自然主義文化」や「心理主義化」と併せて素描し、問題を提起する。第2章では、心理学的知識の社会的機能に関する先行研究を、管理と解放および自己物語という観点からレビューし、本稿の視点や立場について明らかにする。

心理学的知識の社会的機能についての先行研究を振り返れば、心理学者の内部告発や社会学的研究(R.N.Bellah, A.Giddes, N.Roseなど)のいずれにしても、管理機能が解放機能のどちらかの立場から分析している。これらの研究を踏まえた上で、本論ではさらなる心理学的知識の機能や問題点の指摘に向かうのではなく、「心理学」を管理と解放の両方の機能、二面性を有するものとして捉え、従来の研究では解決不能であった心理学的知識の普及はなぜ可能となったのかという問いにこたえるために、知識社会学の視点をとり入れることを提案する。

というのも、心理学的知識が普及する社会的素地として、個人や「心」というシンボルに対する関心が準備されていたと考えられるためである。個人の人格や心に積極的な意味づけと価値づけをする社会はいかにして導かれるのか。心理学的知識が二面性を有しながら浸透してきた理由について考えるには、知識や社会意識の「存在被拘束性」を念頭に置いた知識社会学的な視点が適切である。個人や「心」は、近代社会の中でどのような地位を占めるのか。

このような視点で現在の心理学化の端緒を辿っていく時、最も参考になるのは宗教が社会現象であるばかりか社会が宗教現象であると看破したデュルケムの「人格崇拜(cult de la personne)」の議論である。第3章と第4章では、「心」の聖化と心理学化をE.デュルケム以来の道徳的個人主義の学説史的展開を再構成することから位置付ける。ここではデュルケムの「人格崇拜」論にE.ゴフマンの儀礼論、A.ホックシーロの感情マネジメント論を接続し、それぞれに通底する「人格崇拜」論の構造と異同を明らかにすることによって解答を試みる。

デュルケムは「人格崇拜」概念において、近代社会では個人の人格に「神聖の観念」が宿ると指摘した。彼の道徳的個人主義に関する議論では、世俗化が進行する社会の中で神々に代わって人間が聖なる存在として立ち現れ、個人は社会の道徳的理想の体現である限りで聖性を賦与されることが示されている。個人に対する崇拜と信仰が、宗教による現実世

界の秩序づけが難しくなり始めた近代社会創成期に唯一可能な連帯の絆として用意された。

続いて、ゴフマンはそれを継承して儀礼的行為論を展開し、世俗化の進行する大衆社会において唯一個人が「神」である様子を詳細に記述・分析した。ゴフマンの描きだした20世紀中葉の「人格崇拜」は、E.デュルケムが想定したような普遍的で超越的な道徳的理想というよりも、儀礼的相互行為を慣行することによって互いに聖性を賦与しあうとともに、ふるまいのルールを遵守しない・できない人を「神聖ゲーム」から排除する。個人は「司祭」として「神」の聖性を保持するために「集まり」を操作し、またその力量があるかぎりにおいてのみ聖性を承認された。

デュルケムの宗教論とゴフマンの儀礼的行為論の影響が認められるホックシールドの感情マネジメント論では、人格や「カオ」に加えて「心」に宗教的配慮が払われることが示唆されている。脱産業社会では、行為者は行為のみならず「心」や感情をも絶え間なくマネジメントしている。社会には行為の規則と同様に感情についての規則が存在しており、人々はその要請に応えるよう努め、感情マネジメントを滞りなく遂行するかぎりに聖性を付与される。感情マネジメントや感情労働の概念化で知られるホックシールドの議論を「人格崇拜」論として読む試みを通じ、デュルケムやゴフマンの現代的意義を再評価しつつ、心理学的知識の普及と道徳の心理学化に関する新たな分析視角の導出と理論的枠組みの構築をめざす。

心理学的知識の普及と「心」の聖化の社会学的由来について、デュルケムの「人格崇拜」とゴフマンの儀礼的相互行為論、A.ホックシールドの感情マネジメントの議論を道徳的個人主義の展開という観点から再構成することによって明らかになるのは、道徳的個人主義に連続する個人の崇拜が感情自然主義やナルシズムと結びついて現在の「心」の聖化が生じていることと、心理学的知識や「心の専門家」は、現代人の外部委託された「司祭」（ゴフマン）として普及しているということである。

現代人は、故郷を失い、伝統や宗教の安定機能に依拠し得ず、道徳や振る舞いのルールが不透明化する中で「司祭」役割を担いきれない。心理学的知識は、「心」を根源的な何かとして祀る一方で儀礼的な振る舞いのルールや方法、感情規則や感情マネジメントの方法を提示し、「心」に対する作法を教示する。

第5章から第7章では、第4章までの学説研究から得た一般的理論仮説を特定の経験的調査によって発展させる。一旦対象を限定し、前半部で述べた理論仮説が実際の「心」の聖化や心理学化をどの程度説明しえるのか検証する。どの領域でどのような心理学的言

説が生産されているのか、そしてそれは社会にどのような作用を及ぼしているのか、「心の専門家」は「司祭」として実際にどのような形で適切な振る舞いや「心」に対する儀礼を提示しているのか、また、道徳や自己形成が具体的にどのように心理学化されているのかなどについて明らかにしたい。

主な分析対象は、「心の教育」を冠する全国初の公的機関である兵庫県「心の教育総合センター」である。センターの設置と教育現場における「心理学」の活用推進の直接のきっかけとなった『心の教育の充実に向けて』という提言、センター主任研究員が提案する「心の授業モデル」、「心の授業」の実践報告書、センター関係者からの聞き取り、「心の授業」の参観、教師の研修会で見聞したことなどを取り上げる。

兵庫県は全国に先駆けて「心の教育」を提言し、センターの設置はその象徴であるとされている。行政と大学との連携という形態をとり、実践的相談業務と学術的研究の融合という形をとってパイロット的な取り組みをしている。兵庫県は文部科学省によるスクールカウンセラーの試験的配置開始以来、その配置割合が常に全国平均を大きく上回ってきたこともあって、文部科学省は兵庫県の「心の教育」を全国的モデルの一つとしている。

センター関係者への聞き取りや関連文献の調査結果をもとに、問題行動や逸脱行動が、心理学的な観点から再定義され、心理学の語彙によって記述しなおされる過程、および問題行動の予防や人格形成を目的として心理学的な枠組みが採用され、心理学的な介入がなされる過程を明らかにする。心理学化の諸相について詳述する。

第5章では、資料をもとに、教育現場に心理学的技術を導入する際の説得法を明らかにすることを通して、「心」というシンボルのもとに道徳と「心理学」が錯綜していることを明らかにし、渾然一体となっている道徳と「心理学」の錯綜をほくく。第6章では、生徒の問題行動の予防と人格の発達を目的として、道徳や総合的な学習の時間に教師がクラス集団を対象にストレス・マネジメント法やリラクゼーション法、構成的グループ・エンカウンターなど集団療法を行う「心の授業」を観察し、授業に導入されている心理学的技術の種類と内容を整理する。第7章では、心理学的語彙や心理学的技術を用いた自己形成や社会統制のあり方について、道徳による自己形成や社会統制との対比によって浮き彫りにし、道徳的個人主義の今日的様相と心理学化という観点から分析する。

どのようにして子どもの人格形成と社会統制に心理学的知識を採用するに至ったのかという点、どのような心理学的知識が採用されているのかという点、心理学的知識を採用したことによって人格形成と社会統制の在り方がどのように変容したのかという点、道徳の

られ、これらの社会理論が説く近代社会の変遷と現代社会の特性についての議論を参照しながら、デュルケーム的な「人格崇拜」論がホックシールド的な「感情マネジメント」論に移って行かざるを得なかった経緯について考察される。

一方で、D・リースマンの社会的性格論や最近の物語的自己論の展開にも言及し、現代社会の「人格崇拜」が社会的人格に対する崇拜としての元来の意味が次第にナルシシズム的に物神化されたものへと変化し、感情マネジメントの常態化と商業的利用によって稀少価値を帯びた「自発的」で自然な感情の物神化が混在している状況が説明される。

こうして第四章においては「人格崇拜」から変貌をととげた「心」の崇拜が生起する現代的傾向が確認され、「聖なるもの」をナルシシスティックな個人それ自体に見出そうとする社会的趨勢において、ゴフマンが説いた「神々」であると同時にその「司祭」でもあった諸個人は、次第にその「司祭」の役割を「心理学的知識」という外部に委譲しつつあるとされる。

第五章以下は、具体的素材を用いてこれまでの理論仮説を検証し、「心」というシンボルにおいて道徳と「心理学」が交差する点に注目しながら、心理学化の諸相について詳述するものである。

具体的調査対象として現代日本の「心の教育」を取り上げ、教育のこの領域に心理学化が明瞭な形で現れているとして、特に「心の教育」を冠する全国初の公的機関である兵庫県「心の教育総合センター」での聞き取り、参与観察ならびに実践報告書等を分析対象としている。

第六章では、現実に「心の教育」授業で行なわれている事柄の内容が、ストレス・マネジメントやリラクゼーション法などの心理学的技術であるということが明らかにされる。これを受けて第七章では、心理学的語彙や心理学的技術を用いた自己形成と社会統制のあり方を、道徳によるそれと対比し、この作業を通して、心理学化に関する経験的研究の方向性を模索するとともに、デュルケーム以来の道徳的個人主義の現代的位相に迫り、いわゆる「心理学的知識」がゴフマンの言う「司祭」の役割を代替しているという論点を更に説得力のあるものにしようとする。

最後の第八章では、まず論文後半部のまとめとして、「心の授業」が子供のストレス・マネジメントや自尊心の強化、対人関係における摩擦の減少を目指したものであり、ここでは個人の人格の聖性が与件となっていることを示す。その上で、これがデュルケーム的な「人格崇拜」とは異なったものであり、道徳的問題が「心」の問題とされ、さらにそれがストレスへと解釈替えされたものであると主張する。

審査の過程では幾つかの課題も指摘された。「人格崇拜」をダイレクトに心理学化に繋げることが可能かどうか、あるいは、前半の理論史的考察と後半の言説分析的研究とが方法論的に必ずしも整合的ではないのではないか等である。しかしながら、本研究は社会学の今日的テーマである「心理学化」に対して、理論と実証の両面からこれまでにないアプローチによって社会的に重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認められる。よって、学位申請者の山田陽子は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。